

1 学年の実践記録

(1) 主題に迫るための具体的な手立て

[手立て1]

- ・ 充実した活動を行うために、「たのしさいっぱい あきいっぱい」と「とっても大すき わたしのかぞく」を入れ替える。季節に合わせて学習に取り組むことで、学習の場である勝田公園等大蔵の自然をより生かした学習をすることができる。
- ・ 杉の実保育園との交流を「いきものとなかよし」の単元でも行う。勝田神社で捕まえた生き物を育てる活動を通して、生き物への思いや自分の頑張りを表現しお相手さんに伝える活動を設定する。

[手立て2]

- ・ 児童の意欲の持続や高まりにつながる、様々な形態での伝え合い活動の充実
- ・ 児童の考えを引き出し、気付きを高めるワークシートの活用

[手立て3]

- ・ 本単元後の国語科「しらせたいな見せたいな」の学習との関連を図ることで、書こうとする題材に必要な事柄（様子・特徴など）をよく観察して書くことができる力を伸ばす。

(2) 研究の実際と考察

[手立て1]

「たのしさいっぱい あきいっぱい」の単元は、活動時期がその年の気候に左右されやすいため、杉の実保育園への発表会の交流を「いきものとなかよし」の単元で行った。そこで「とっても大すき わたしのかぞく」を9月から12月に移した。

「たのしさいっぱい あきいっぱい」では、季節に合わせて活動をする事ができた。そのため、小単元「あきみつけをしよう」から小単元「つくってあそぼう」まで、取り組む期間が長引かず、児童の意識を持続する事ができた。秋の勝田公園の自然に十分触れることができ、友達やお相手さんとかかわりながら遊ぶことのよさや楽しさ、季節の変化に気付く事ができた。また、自分や友達のよさや頑張りに気付く事ができた。

「とっても大すき わたしのかぞく」を12月に学習することで、学んだことを冬休みにも継続して実践できるようにした。

「いきものとなかよし」では、身近な勝田神社で生き物を捕まえた。その虫を観察したり、すみかやえさを用意して飼ったりする活動を通して、それらの生育環境や変化や成長、生き物は生命をもっていることなどに気付き、生き物の立場に立ってすみかや世話の仕方などを考え、生き物への親しみをもち大切に世話をするようにした。その継続した関わりから、生き物にも生命があり成長、変化することに気付き、生命の大切さを実感を伴って学ぶようにした。生き物への思いや自分の頑張りを表現し、お相手さんに伝えることでそれぞれのよさに気付く事ができた。固定のお相手さんとの繰り返しの交流であり、発表会をスムーズに行う事ができた。



〔手立て2〕

児童の意欲の持続や高まりにつながる、様々な形態での伝え合い活動の充実を図るために、1学期に行った小単元「オタマジャクシのことを教えてもらおう」の2年生との交流学习、2年生がオタマジャクシを育てて気付いたことや思ったこと等をお話してくれたことを想起させた。すると、「わたしたちも、生き物を飼ってみたい」「2年生にしてもらったように、保育園のお相手さんに教えてあげたい」という思いをもつことができ、

活動の方向付けをしたり、学習の見通しをもたせたりすることができた。2年生から教えてもらったという経験をもとに、自分自身でどの方法でお相手さんに伝えるかを考えることができた。ペープサートや紙芝居、絵本、ポスター、新聞、クイズなど様々な形態での伝え合い活動を行ったことにより、1組と2組で交流した時には、

「〇〇さんの紙芝居が分かりやすかったから、ぼくも絵を大きくかきたい」や「私の絵本は説明ばかりで、お相手さんが楽しくないと思うから〇〇さんみたいにクイズを増やしたい」と授業週末の振り返りの活動の際に発言した。資料1のワークシートからも、「保育園のお相手さんに分かりやすいように」という思いが持続していることが分かる。互いの発表を聴き合い、アドバイスし合うことで、自然と自分から「さらに紹介の仕方を工夫をしたい」と次への活動のめあてをもつことができた。自然な形で、これまでの活動を振り返ったり、振り返った中で教えたことを選択したりして言葉や絵などで表現する活動へとつながり、これまでの生き物とのかかわりの中で気付いたことを自覚化、明確化できたのではないかと考える。

資料2と資料3のワークシートは、単元終末に書かせたものである。

資料1



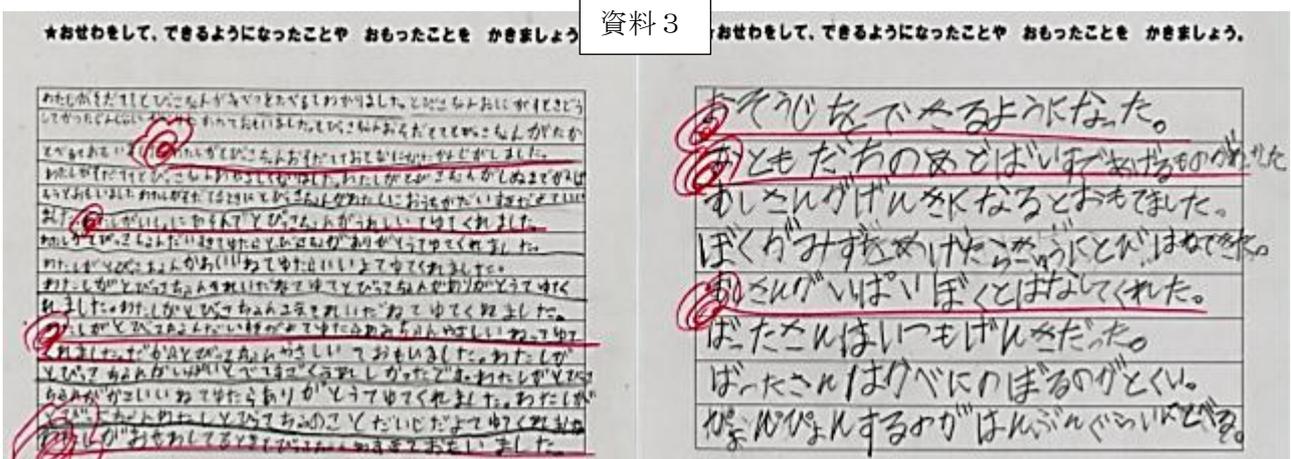
★おせわをして、できるようになったことや おもったことを かきましょ

資料2

★おせわをして、できるようになったことや おもったことを かきましょ。

資料2のワークシートからは、生き物と触れ合い、次第に生き物への親しみや愛着が増したことが分かる。また、「人間のことを考えている」「きもちいいよーと思った」「ありがとうと言っている」という

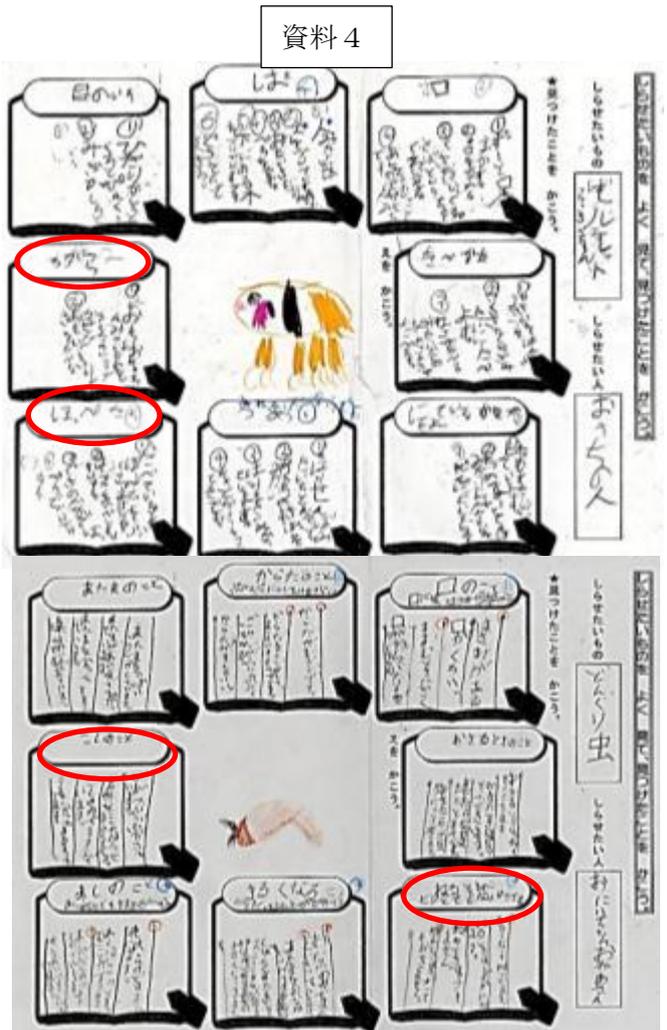
ような記述から、生き物と自分の気持ちの距離を縮めることができたと考える。



資料3のワークシートからは、自然に自分と友達の生き物を比べ、体や動きの特徴などの共通点や相違点に気付いたり、お世話の仕方や触り方などでアドバイスをし合ったりしていることが分かる。また、「とびちゃんを育てて、大人になった感じがした」という記述より、生き物のために何かお世話をしたいという気持ちをもって単元を通して繰り返しかかわったことで、自分自身の成長に気付くことができたのだと考える。

【手立て3】

本単元後の国語科「しらせたいな見せたいな」の学習を行った。導入段階で、保護者に学校にいる生き物を知らせたい！伝えたい！という思いをもたせ、書く題材に必要な事柄（様子・特徴など）をよく観察して書くためには、どんな項目をあげればいいのかを考えさせた。その際に、「虫を育てたときに、体の様子やえさを食べているときの様子を詳しくカードに書いたら、保育園の友達も分かりやすいと言ってくれた。」と観察の視点が子どもたちの中から、出てきた。生活科学習で学んだことを生かして国語科での題材に必要な事柄を整理してそれぞれの子どもたちが選んだ生き物の特徴をたくさんメモに書くことができた。資料4のA児やB児のワークシートからもわかるように、目や手だけの様子にとどまらず、「力強さ」や「ほったた」、「こし」の様子までも細かく観察して書くことができる。本単元の学習の際に生き物と自分の気持ちの距離を縮めて、世話をしたり、生き物に対する思いを表現したりすることができるようになったので、国語科の学習ではさらに表現の幅を広げ、題材について詳しく書くことができたのだと考える。



(3) 成果と課題

[成果]

- 年間の単元配列を変更したことで、季節に合わせた取り組みがしやすくなった。「たのしさいっぱい あきいっぱい」では、存分に秋を楽しむことができた。また、「とっても大すき わたしのかぞく」では、冬休みへの継続した活動へつなげるなど、児童の意識がスムーズに流れ学習に取り組みやすくなった。
- すぎのみ保育園のお相手さんは、年間を通して固定されているので、単元が変わっても無理なく交流することができた。回数を重ねるごとに児童と園児に親密さが増してきた。
- 他学年他クラスと交流することで、多様な表現方法を学ぶことができた。

[課題]

- 伝え合う活動では、相手を意識し様々な表現方法を考えてきた。保育園の「お相手さん」を意識すると、文字は使えず、絵や言葉での表現になる。1年生としての表現方法の多様化や内容の質を高める学習と相反することになり、単元で軽重をつけるなど工夫が必要と思われる。